GREEN COMMUNITY COLLEGE
NEWS きのくに
2015〈春夏号〉
Vol.21【1】

P1 地方創生の現場から　中嶋正博
P2 古座川町のもうひとつの挑戦　仲本耕士
P3 紀南地方をスポーツ合宿の聖地に！　平尾好孝
P4 くじらとともに生きるまちづくり　宇佐川彰男
P5 恋愛で地域を元気に　廣本恵子
P6 トルコとの交流、地域との交流　丸石恵子
P7 不白、高野山へ。江戸千家宗家記念茶会　鈴木裕範
P8 きのくに活性化センターと地域

きのくに活性化センター 発行責任者／中田肇 発行日／2015年7月 〒646-0011和歌山県田辺市新庄町3353-9 BIG・U内 TEL&FAX0739-26-9670 http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

地方創生の現場から

和歌山大学経済学部准教授 中島正博

地方創生が、日本で進行中である。これは、何年も前から人口減少が予測されているが、人口減少の結果、経済の活力も失ってしまうわけで、それを本気になって解決しようという試みである。

国においては、2060年に１億人程度の人口を確保する中長期展望を提示する「長期ビジョン」と、そのために今後５年間で取り組むべき政策をあげた「総合戦略」を立案した。地方自治体においても、各地域の人口動向や将来人口推計の分析、中長期の将来展望を提示する「地方人口ビジョン」と、各地域の人口動向や産業実態等を踏まえ、2015～2019年度（５か年）の政策目標・施策を提示する「地方版総合戦略」を策定することになっている。現在ほとんどの市町村では、その策定作業にはいっている。

地方版総合戦略は、何をやるかではなくどんな結果を残すのかというＫＰＩというアウトカムの指標を設けなければならないこと、「産官学金労言」といって、とりわけ市町村にとっては、これまであまりお付き合いなかった、金融機関や労働団体、マスコミも加わった外部検討委員会で策定・検証しなければならないことなどの新しいハードルがかけられている。どのようにすれば、そのハードルがクリアできるかということに腐心することになりそうである。

しかし、落ちついて、国の長期ビジョンを見てみよう。「自らの地域資源を活用した、多様な地域社会の形成を目指す」はもっともなことだが、「東京圏は、世界に開かれた“国際都市”への発展を目指す」という項目では、「東京圏の人口集中・過密化の是正により、東京圏が抱える課題の解決につながる。東京圏は、日本の成長のエンジンとしての重要性は変わらず、今後は世界をリードする“国際都市”として発展していくことを期待」されている。

北山川を行く。北山村観光筏下り

なんのことはない。これからより深刻な高齢化を迎える東京の高齢者が地方に引っ越してもらえれば、その介護等のために東京に来ている若い女性労働力も地方に分散することができ、しかも、東京の出生率は低く、地方のそれは高いのだから、少子化社会も解消するだろう、という構図が見えてくる。だから「地方創生が実現すれば、地方が先行して若返る」のだ。高齢者といってもみんながみんな寝たきりではないわけで、移住してきた高齢者がスポーツや文化活動もできる高齢者タウンとして、ＣＣＲＣ（健康状態に応じた継続的なケアをうけることのできる、退職高齢者向けのコミュニティ）などという構想も立ち上がってきた。温泉があり、ゴルフ場もある紀南地域は、ＣＣＲＣ構想の適地かもしれない。

私たちが地域の活性化に取り組むのは、東京をはじめとする他の地域のためではない。自らの生まれ故郷であったり、何らかの縁があったりして、馴染んだこの地域のことが、この地域に住んでいる人のことが好きだから、地域活性化に取り組んでいるのだ。地域に安定した雇用を生み出すことは、Ｕターンも含めて、なにも東京から人を呼び戻すためではあるまい。

私たちの地域の未来は私たちでつくるんだ。

古座川町のもうひとつの挑戦
～人口減少と健康福祉の取り組み～

古座川町健康福祉課長 仲本耕士

紀伊半島南部の最高峰、標高1,121mの大塔山に源を発する古座川流域に広がる古座川町ですが、総面積は294.23㎢、人口は2,950人で、65歳以上の高齢化率は50%の町です。町面積の約96%が森林ということで、かつては林業の盛んな町でしたが、高度成長や林業の衰退とともに、1955年当時1万人いた人口も、私が役場に就職した1980年頃には半減の5,000人、現在は3,000人を割り、10年後の団塊世代が75歳となる2025年には、2,500人という人口予測も出ています。

さらに衝撃的だったのが、昨年「日本創生会議」が発表した人口減少に伴う全国896にもおよぶ消滅自治体の公表でした。古座川町も当然それらの自治体に入っており、人口問題への関心が高まっていますが、人口数値だけでなく大切なのは安心できる地域社会のなかで、いかに生き生きとした町づくりを進めるかです。

古座川町も観光振興や特産品づくりなどの産業振興や交流人口の増加、都会からの移住による定住策、若者定住に結びつく様々な施策に取り組んでいます。観光資源である清流古座川の景観保全に努め、一枚岩などは南紀熊野地域の「日本ジオパーク」の認定におけるシンボル的な存在であり、滝の拝や虫喰岩、串本町の橋杭岩などとともに道の駅を設け交流施設としており、特産品においても、平井地区でのゆず加工品づくりをはじめ、最近では獣害対策と連携したジビエ料理の売出しにも懸命です。

古座川と町の中心部高池地区

また0歳から15歳までの保育所・小学校・中学校の一貫教育の推進や英語教育の充実、中学生までの医療費の無料化など子育て支援も積極的に進めています。

そして、古座川町のもうひとつの挑戦として、健康福祉に対する取り組みです。本年4月から古座川町川口地区に建設された古座川町保健福祉センターが業務を始めていますが、平成23年台風12号の紀伊半島大水害で被災した明神診療所をはじめ、明神出張所、役場の保健福祉業務、さらには地域包括支援センター、社会福祉協議会などを一体とする保健医療福祉等の複合施設として整備されたものです。

オープンした町保健福祉センター

古座川町における健康づくりや福祉活動の拠点として、住民が健康で安心して暮らせる一層の町づくりを進めていくキーステーションとなる施設です。

人口減少の歯止めに何らかの効果をもたらすには、産業振興や定住施策、子育て支援などの若者施策の取り組みとともに、健康や福祉に対し真っ向から取り組み、いかに住みやすい町を創造していくかです。そして、新しい価値観を持ったライフスタイルや地域づくりを進めていく視点が大切になるのではないでしょうか。

当面は、まだまだ進むであろう超高齢化社会において、医療・介護・介護予防・住まい・生活支援を軸とした新たな取り組みである地域包括支援システムの立ち上げが重要となってきます。

古座川町もそうした取り組みに新たな挑戦をしようとしており、そのための地域連携や人材育成に向けてどのような事業展開をしていくか、保健福祉センターを中心とした活動に地域からの期待も大きなものがあります。

紀南地方をスポーツ合宿の聖地に！

上富田町教育委員会課長補佐
国民体育大会準備グループ
平尾好孝

人口15,300人の小さな町「上富田町」はいま、スポーツ交流人口、年間12万人を目指し、様々な取り組みに挑戦しています。

上富田スポーツセンターが出来たのが平成７年、地域のスポーツ振興の拠点として開設しました。その位置付けは現在も変わりませんが、予想に反して、年々県外からスポーツ合宿に来る団体が増えてきました。種目やカテゴリーも様々です。本年度は10万人の来場者を見込んでいます。施設も、年々改修を重ね、野球場１面、サッカー場３面、雨天練習場１面、テニスコート４面あり、今では和歌山県を代表するスポーツ施設となりました。

スポーツセンターの土日祝祭日や夏休みなどの長期休暇の稼働率は90％を超えています。閑散期の稼働率は10％前後、スポーツ施設だけでなく宿泊施設も同様です。スポーツ合宿を誘致することは、地域のスポーツ振興にも大きな影響を与えます。そのため、スポーツ少年団や中学校や高校のスポーツ交流、プロチームによるスポーツ教室などを積極的に開催しています。トップアスリートの技術を学べる良い機会です。

NTTドコモ・ラグビーチームの合宿風景

交流人口が増加するに従い、町内のいろんな業種の方々の動きが活発になります。一昨年７月には、町内の宿泊業者や仕出し業者、観光協会、商工会などが「上富田町スポーツ観光推進協議会」を設立しました。合宿に来た団体に対して、上富田町に宿泊していただく、上富田町のお弁当を食べていただく、お土産を買っていただくなどの取り組みを組織として始めたもので、宿泊部会と弁当部会から構成されています。宿泊部会については、スポーツ団体のニーズに答え、トレーニングルームやミーティングルームの設置、食事の量や栄養バランスに注意していただいています。また、弁当部会は町内６業者が協力し、和歌山大学の先生や栄養士の指導の下、スポーツ選手に特化したバランスのとれた弁当「上富田スポーツセンター弁当」を開発しました。手作りの味、BCAAが7,000mg以上というのがキャッチフレーズです。本年度は１万食の注文を見込んでいます。

上富田スポーツセンター

利用者の立場に立って考えると、一本の電話でスポーツ施設、宿泊施設、弁当等の予約が同時に出来るワンストップ窓口があれば便利で、上富田町も近い将来導入を目指しています。リピーターを増やすためには、スポーツ施設、宿泊施設、弁当、その他環境のすべてが良好でなければなりません。近畿自動車道紀勢線が、７月12日に白浜まで開通しました。「近くなった和歌山」を全面アピールし、町全体で「おもてなし」をしていく、そういう気持ちが大切になってきます。年間、10万人が上富田スポーツセンターを利用した場合、想定で２億円の効果があると言われています。スポーツを切り口に、いろんな業種の方々を巻き込みでいく方針です。

広域的な取り組みも大切です。昨年、田辺市を中心に設立した「南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会」はこの広域的な取り組みを地域全体で実施しています。スポーツ合宿＋１は、スポーツ合宿後に地域の観光施設に立ち寄っていただくのがねらいです。

９月には、44年ぶりの国体が和歌山県で開催され、上富田町ではサッカー、ラグビー、軟式野球の３競技が開催されます。国体後にはスポーツ交流人口、年間12万人を達成出来るよう、宮崎や鹿児島に負けない「スポーツ合宿の聖地」になるよう地域が一丸となって、取り組んでいきたいと考えています。

くじらとともに生きるまちづくり
～太地のイルカ追い込み網漁と水族館締め出し問題～

太地町教育委員会教育長　宇佐川彰男

追い込み網漁による太地町のイルカの捕獲をめぐり、世界動物園水族館協会（WAZA）は、「残酷だ」と問題視して、今年４月22日日本動物園水族館協会（JAZA）に対して1ヵ月以内にイルカの購入をやめなければ、協会から除名すると通告してきました。残留か除名かを突きつけられたJAZAは、一ヵ月後の５月20日、追い込み網漁によるイルカの入手を禁止、入手を続ける水族館は除名処分にすることを明らかにしました。

WAZAの除名通告を知ったときの、率直な感想は「ここまで来たか」というものでした。これは、「ザ・コーヴ」（米国映画。2010年アカデミー賞・長編ドキュメンタリー賞を受賞）と一緒、根っこは同じです。水族館問題など最初は言っていなかったのに急展開した背景には、「ザ・コーヴ」をつくった連中による圧力があったのではないか、というのが私の見立てです。JAZAが、成り行きがわかっていながら会員投票で多数決の方法をとったのは、立場はわからないでもありませんが、残念なことでした。

まちづくりが構想される森浦湾

人気のイルカショー

鯨類の文化を紹介ーくじらの博物館

今回のWAZAとJAZAの対応について、いくつかの指摘をしたいと思います。まず太地の追い込み網漁によるイルカの捕獲は、国が捕獲枠を決め、和歌山県が認可している正当な日本の漁業だということです。それだけにJAZAの決定は、自国の漁法を否定することになりませんでしょうか。二つ目は、鯨類専門で生計を立てている漁業者が現在12軒ありますが、20歳代から70歳代まで各世代の漁業者がいます。「残酷だ」と指摘された漁法については改善の努力も行ってきており、そうした実績に目が向けられていません。地元漁業者の暮らしと漁業文化を守るのは、町の責任です。三つ目は「イルカビジネス」の正当性の問題です。太地で捕獲されるバンドウイルカなどが20園館、国内のみならず海外10ヵ国に提供していますが、目的はイルカの学術研究が中心と考えています。こうした背景には、太地町にくじらの博物館を開設して40年、イルカの飼育や繁殖に関する優れた研究があるからこそと自負しています。協会が禁止を決めても、続けることを検討している水族館があることは、そのことを示しています。

食をはじめ文化をめぐっては、いろいろな意見があります。しかし、対立、対決は不毛です。一方的な否定ではなく、認め合い、話し合ってやっていくことが大事です。太地町は、これからもくじらとともに生きる町づくりに取り組みます。森浦湾を舞台に鯨類を放流し、人が鯨と泳ぐ海水浴場など愛でて学ぶ将来構想をもっており、一歩一歩推進していく方針です。鯨の町、イルカがいる町について子どもたちに教育の場で学んでもらいます。「地方創生」「戦略会議」設置が言われますが、わが町は市町村合併で単独を選択したときから、すでに町の30年構想を立てて、やって来ています。イルカについてももっと研究を推し進めます。それが、私たちの太地が生きる道だと思っています。

シリーズ 地域をつくる女性たち⑫

恋愛で地域を元気に
～婚活サポートで少子化対策と経済活性化～

恋ゼミ実行委員会代表　廣本恵子

紀南地方において、婚活事業や大規模合コンなどが開催されていますが、そういう場を活かせない人の存在が浮かび上がってきています。

そこで平成24年４月１日、地元の有志を中心に、田辺商工会議所にもご協力をいただき、男子ゼミ女子ゼミプロジェクト実行委員会（現、恋ゼミプロジェクト実行委員会）を発足致しました。活動目的は人間の内外面の魅力を高めるアドバイスをすることです。これは一人でも多くの人が、よりよいパートナーと巡り合い、家庭を築き、家族を増やすことにも繋がるため、少子化対策に繋がります。また恋愛をするにおいて、例えばデート前に服装を新調してみたり、レストランで食事デートをしてみたりと、地域の経済活性化の効果も期待できます。

当実行委員会メンバーは基本女性で構成しており、主な企画活動は私ともう１人の女性との２名で行い、サポーターメンバーとして活動に賛同してくださる地域の方々を募り運営しております。活動は月１回の「恋愛講座」と「婚活パーティー」を開催し、サポーターメンバーにも参加者へのアドバイス等行っていただいております。

私たちは、まず昨今のブームとも言われる婚活パーティの実態や、独身男女の恋愛事情を調査していきました。その中で最初に見えてきたことは、婚活パーティ参加者のマンネリ化です。次に見えてきたことが男性の身だしなみに対する女性の不満と、女性の婚活パーティにおける参加態度に対しての男性からの不満でした。そして一番の問題とも思われることも見えてきました。それは独身の男女の婚活に対する意識の低さでした。

まずマンネリ化については原因の一つに、運営側が『婚活パーティの開催＝出会いの場の提供』と勘違いしていることがあります。婚活パーティではカップリングしなければ、街中ですれ違った程度と同義で、決して『出会い』ではないのです。

また身だしなみや参加態度などに対して私たちは、地元の美容室やアパレルショップ、人材教育団体に講師を依頼し、恋愛における身だしなみやコミュニケーション術の講座を行いました。またシミュレーション婚活パーティと題し、講座ごとにその復習と実践を目的に婚活パーティも開催してきました。そして講座とシミュレーション婚活パーティで、必ず参加者に婚活パーティの心得を伝えてきました。

その結果、通常婚活パーティのカップリング率は１割～２割と言われている中、私たちのシミュレーション婚活パーティでは、カップリング率は平均４割を超えています。また発足して約３年、これまでカップリングしたカップルから、既に4組以上のカップルがご成婚され、ご家庭を築き始めています。

これはコミュニケーション力（話すことはもちろん、聴くことも）を高めたり、好感の持てる身だしなみに変えたり、しっかりと心構えをしていくことで、マンネリ化し男女が双方に不満だけを残していた婚活パーティが、参加者自身の変化によってよりよい出会いの場になった結果です。

ご参加いただいた方から、「挑戦してみて良かった」「背中を押してもらって良かった」という声を、よくかけていただきます。

このように、婚活は婚活する本人が本気で恋愛していくことが一番の鍵であることが、これまでの活動で実感しています。そのための変化を恐れず努力を惜しまない人には、必ず素晴らしい出会いが生まれます。私たちはそういった方を、全力でサポートしています。

恋愛で地域を元気に。

恋愛講座の授業風景

シリーズ 地域をつくる女性たち⑬

トルコとの交流、地域との交流

串本町トルコ文化協会代表 丸石恵子

125年前、串本町大島樫野で587名の犠牲者を出したトルコのエルトゥールル号の遭難は、悲劇ではあったけれど、トルコとの友情の始まりでもありました。「串本町トルコ文化協会」は15年前、田嶋町長がトルコを表敬訪問された時、トルコの民族舞踊を見る機会があり、これを串本で踊れば何よりの交流になると、町民に呼びかけをして集まった有志から生まれた団体です。2001年のことです。

衣装や踊りは姉妹都市であるメルシン市や日本在住の留学生の協力を得ることが出来ました。練習した踊りは町内をはじめ県内外でも披露させていただき、その時にエルトゥールル号の遭難や、トルコとの交流の話をさせて頂きます。2010年にはトルコで踊ることも叶い、踊った後の本場の人たちからの、スタンディングオベーションと万雷の拍手は忘れられない思い出です。踊りを通して生活習慣などがわかるにつれ、食べ物や風習、言葉、文化、それに何にもましてトルコの人たちの事をもっと知りたくなり、料理を作ったり、串本においでになるトルコの方と交流を持ち、ホームステイを受け入れるなどの活動もするようになりました。12月に公開される映画「海難1890」の串本ロケでは、地域の皆さんと一緒に炊き出しをして、私たちはトルコ料理をふるまいました。もちろん、エキストラにも参加することが出来ました。

トルコ軍艦遭難慰霊碑

このように私たちがトルコに関わり、トルコの方たちと仲良くなれたのは125年前の樫野の先人たちの献身的な救助活動のおかげです。慰霊碑におまいりする事や、慰霊碑の前の清掃、花の栽培は、エルトゥールル号で亡くなったトルコの方たちを慰めるとともに、樫野の先人たちへ感謝の気持ちを伝えるという思いもあります。

そして私たちが15年もの間活動を続けられたのは、町のみなさんが暖かく見守ってくれたおかげだと思います。節目に開催する当協会主催の行事の時には、チケット販売や会場の事等多岐にわたって町の他の団体の方々が協力してくださり、親身になって応援し、成功を祈ってくれます。

エルトゥールル号120周年記念ブレ事業で

串本のような規模の町でそれぞれが長く活動していくにはお互いに助けあうということが不可欠です。そういう意味で、国際交流するにはまず町内交流ということを日々の活動を通して実感します。お互いに横の線が繋がっている串本という町は、やはり先人に恥じない、という気持ちが心のどこかに根付いているのかもしれません。そして最後になりましたが行政との関係もとても大切だと思います。「自分たちが考え、自分たちが行動することを基本とし、行政は後方支援に徹することが、会員の認識を単なる住民から地域社会の一員へと、サービスを受けるだけの存在から与える側の存在へと変化させていった……彼らの姿勢は必ずや多くの人びとの共感を得、受ける側から与える側へと輪を広げていくことだろう。町民の地域社会への関与の欲求というものはいまだ形をなさぬ流れとしてではあるが、確実に存在している。この流れに具体的な形を与えることのできる環境あるいは場を提供していくことが、行政が果たすべき国際交流の業務であると考えている。」

これは2001年地域づくりという月刊誌に掲載された国際交流の進むべき方向と当協会についての田嶋町長の記事の一部です。私たちは常にこの言葉を裏切らないように、この期待に応えることができるよう活動し、そしてこの言葉を励みに、これからもトルコとの交流を深めていきたいと思っています。

不白、高野山へ

～高野山開創1200年記念江戸千家宗家御供茶式・茶会参加の記～

きのくに活性化センター事務局長
鈴木裕範

弘法大師空海が、高野山に真言密教の修行道場を開いてことしで1200年。これを記念する大法会が４月２日から50日間行われました。参拝客や観光客であふれた４月12日、川上不白の茶の湯の道統を伝える江戸千家宗家による御供茶式・記念茶会に参列しました。

不白は、江戸時代の享保年間に紀州藩新宮水野家家臣の家に生まれ、表千家７代如心斎宗左に茶道を学び、32歳で江戸に出て千家流茶道の普及に努め、一流を許されて江戸千家流祖となりました。その名前は、多くの業績やエピソードとともに、茶道の歴史に刻まれています。江戸千家宗家蓮華庵川上閑雪家元は、10代目家元になります。宗家は2007年に流租不白の200回忌法要と茶会をふるさとの新宮市で開かれ、そのおり、わたしは茶道誌『狐峰』に「不白、ふるさと熊野に帰る」と題した短いエッセイを寄せました。そうしたご縁もあって、今回「願っても得られない」お席にご案内をいただいたのです。

江戸千家による高野山での御供茶は、初めてのことです。「不白、高野にのぼる」、わたしは心待ちして、ようやく三分咲きの桜のお山にのぼりました。法会の舞台となる壇上伽藍の金堂は、厨子の扉が初めて開かれ、秘仏であるご本尊阿閦如来(あしゅくにょらい)が豊かなおすがたを現わしています。ほのかな明るさの中で、如来は白く輝いて見えました。

総本山善通寺による慶賛法会は午前９時、法主樫原禅澄猊下を導師に約20人の僧侶が内陣の席につき、始まりました。きらびやかな僧衣に身を包んだ僧たちの読経が堂内に響き、広がっていきます。それはおごそかな音楽を聞くようでした。それにあわせて、お供えする茶と花の御供茶と御供花式が行われます。

家元による御供茶点前

法会が行われた金堂

閑雪家元のお点前の、その一つ一つの所作に、阿閦如来のまなざしがそそがれています。「常」という不白の言葉が、思い出されました。まずお濃茶が、つぎに薄茶が、僧侶の手で阿閦如来に供えられました。深々と頭を垂れる家元。内陣を囲む大きな柱のそばで、行儀の悪さを詫びながら、拝見しました。読経とお点前といけばなが一体になり、如来を敬い、大師をたたえました。堂内を埋めつくした社中や信者らすべてのものが、「南無大師遍照金剛」といく度も大師の名を唱和するなかを、僧侶が退場し１時間に及んだ法会は終わったのです。

お点前をされる若宗匠

記念茶会は、金剛峯寺本坊の新書院と奥殿の茶室で行われました。拝服席の新書院の床は、お軸が「入相鐘人待櫻哉(いりあいのかねひとまつさくらかな)」、不白の筆は雄渾です。句は利休です。白牡丹が床を飾りました。一席目は正客に東大寺長老上野道善猊下、次客は煎茶道二條流二條雅荘家元で、その席で紹雪若宗匠のお点前でお濃茶をいただきました。副席の床のお軸はこれも不白の筆になる柳の絵に「花紅」の二文字、89歳のときの作品といいますが、洒落ています。花は白雲木に明石潟椿。お菓子は拝服席が「都の春」で副席は「うすくれない」。お道具立ては高野の春を祝い大師に思いを寄せる、花尽くしの茶会で、随所に、不白がすがたを現していました。

2019年は、不白の生誕300年です。ふるさとで必ずしも十分に語られてきたとはいえない「孤峰」の号をもつ大茶人川上不白。その人物像に目を向けるとき、茶道にとどまらない不白の魅力が見えてきます。「地方創生」が叫ばれる時代に、学びたい熊野人のこころがあります。

きのくに活性化センターと活動

移住の課題は何か―センターが和歌山県南部におけるI・Uターン調査へ

紀南地方は過疎、人口減が続く一方で、近年田辺市などに移住する人が目立つ。若い世代もみられ、移住の目的も変化している。人口減少・少子高齢化社会は、定住人口増への努力とともに交流人口の拡大が課題。きのくに活性化センターは今年度事業で、これからの移住者対策の可能性と課題を明らかすることを目的に「和歌山県南部におけるＩ・Ｕターン調査」の実施を決定。Ｉ・Ｕターン者に、移住後の満足度、移住時における問題、地域の支援などを調査し、行政へ提言を行う。

調査は今秋のスタート。地域に元気、やる気を与えている人たちを訪ねる。みなさんのご協力をお願いします。

田辺市合併10周年を祝う記念式典に中田肇会長、鈴木事務局長が出席

小泉政権下での平成の市町村合併。田辺市は合併10周年を迎え５月２日、紀南文化会館で記念式典を開催。センターからは中田会長と鈴木事務局長の２人が出席。

真砂市長は、2005年５月１日、当時の田辺市、中辺路町、本宮町、大塔村、龍神村の５市町村が合併して誕生した新田辺市の足跡を振り返り、「多種多様な地域特性を大切にし、市民が誇りを持てるまちづくりをめざしたい」と述べ、自然環境を活かしながら暮らすビジネスモデルの確立など、これからのまちづくりの基本方針を示した。

式典では作曲家八木澤敦司氏が田辺のために作曲した記念曲が披露され、合併の年に生まれた会津小学校４年生の原太陽君と富田彩葉さんが市民憲章を朗読、市内11の小学校児童250人による大合唱団が大阪交響楽団の演奏で「あすという日が」を歌い、節目の10年を祝った。

新入生約340人が田辺市で「宝物」を探す

学修『田辺クエスト』は、新入生に相互の親睦と地域理解を深めることを目的に経済学部が４月11、12日に合宿研修の一環として田辺市の中心市街地で初めて実施。11日午前、新入生約340人は４、５人のグループに分かれて扇ヶ浜を出発、田辺市の歴史や文化、経済に関するクイズを解きながら、目的地（宝物）をめざし、街は、地図やスマートフォンを駆使して歩く学生たちであふれた。この学修に田辺市が全面的に協力、市役所勤務の和大OB、OGらがクイズの作成に協力、また当日、各目的地に立つなどしてサポート。夜は、宿泊先のみなべ町のホテルで、クエストの表彰式のあと、きのくに活性センターの鈴木事務局長が「田辺から日本が見える―日本の縮図・田辺市」と題してミニ授業。事務局長は、自然、歴史、産業など田辺市がもつ特色や課題をあげて「現在の日本が抱えるほとんどの課題が田辺にある」と指摘。そして、「ここは人との出合いがあり、『生きるヒント』や『人間論』などを学ぶ場。ぜひ紀南を歩いてほしい。地域の人たちは、あなたたちとの出合いを待っています」と語りかけた。

▲市民憲章を朗読する原君と富田さん

▲田辺クエスト出発式　（左）滝学長（右）真砂市長

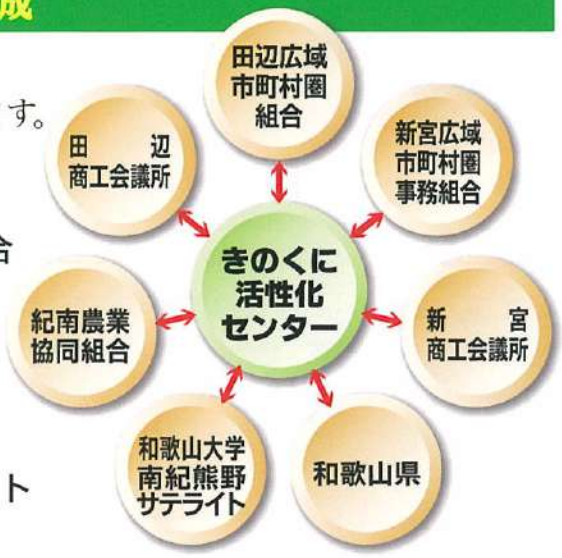
田辺の街なかは
学生たちであふれた

授業を聞く学生たち

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、
以下の団体・機関で構成されています。
（2015年6月30日現在）

- ●田辺周辺広域市町村圏組合
- ●新宮周辺広域市町村圏事務組合
- ●田辺商工会議所
- ●新宮商工会議所
- ●紀南農業協同組合
- ●和歌山県
- ●和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

◆「地方消滅」論が話題を集めるなか、各地方自治体はどのような再生・創造の戦略案をまとめるのか、力量が問われている。地方自治の現場でいま何が。『NEWSきのくに』は、自治体関係者の皆さんに、わが町の取り組みについて寄稿いただき、地域の再生・創造を考えてみました。

◆「不白、高野山へ」文中の御供茶式・記念茶会の写真は、雄山閣の宮田哲男氏にご提供いただきました。（す）